

平成 27 年 5 月号

今月の断酒表彰

- ☆ N・T さん 南千里支部 断酒 六年
- ☆ N・K さん 吹田支部 断酒 十年
- ☆ M・N さん 南千里支部 断酒十五年

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

断酒に思う (57)

あのとき考えていたこと

吹田支部 O・H さん

私がお酒のことについて考え始めたのは何時のことかあまり覚えていません。

みんなと飲んで、二日酔いになった時か、意識を失って、翌朝憂鬱気分になった時か、会社の仲間に酒が過ぎると言われた時か、家族との約束を破ってそのことを鬱陶しいと思った時か。あまり思い出せません。ただ、私のお酒のことについて周りの人たちにつべこべ言われた時は、猛烈に腹が立ち反発し邪魔に思ったことは確かです。

私の酒に関して私以外の人間がなぜ文句を言うのか、解らないでいました。しかし、問題があることは私自身薄々感じていました。

家族との関係・会社での関係・体の調子などなど。でもそんなことも、一杯の酒を飲めばすべてが忘れられる・解決すると思っていました。しかし、酔いからさめると、それらのことが一時に突きつけられます。それから逃れるために、また一杯のお酒を飲むのです。いろいろ屁理屈、言い訳を考えながら飲むのです。

酔いがさめると、そのことの繰り返しでとうとう自分の居場所が解らなくなってきました。そのころにはもう、体も悲鳴を上げ、心も悲鳴を上げています。でもその前にもう一杯飲んでからでいいかな、などと考えました。

家族には責められ、泣かれ、絶望されました。病院での診察時に入院を勧められた時はショックでした。これを認めてしまうと、もうお酒が飲めなくなってしまうことと、会社にはどう言い訳・説明をすればいいのかと言うことが頭の中がぐるぐる回りました。しかし、私もわかっていました。自分のお酒に問題があることは。決断がつかなかった、もう少し先に延ばしてお酒を飲みたかった、だけだと思います。入院する前、職場で病気のことを話すときは気まずい嫌な思い出です。しかし、そのことを話し入院した時は、すごく心が軽くなったことは今でも覚えています。



平成 27 年 5 月 1 日発行 No.147

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

入院生活は私には意外と快適でした。ただ、退院後に職場復帰する事が出来るのか、またどんな態度で復帰するかは考えていました。でも、気まずい事はありませんでしたが、思っていたよりはスムーズにいったと思います。

自分が思っていたほど、会社は自分のことを思っていなかったのかもしれませんが。自分がいなくても仕事は進んでいます。

少し屈折した考えかもしれませんが。でもそう考えると、体の力、肩の重みが少し楽になれたように思います。

退院後は、自分・家族を優先に考えて行動するように心掛けています。

これから長い断酒生活を続けていくためにもお酒の怖さを忘れずに日々過ごしていきたいと思っています。

祝 40 周年

2015 年 5 月 6 日(水・祝)

吹田市断酒会 40 周年記念大会

場所：大阪学院大学 15 号館

吹田市断酒会員集合時間：9:00

会員・家族の結集をお願いします。

今月の「指針と規範」断酒会規範

九 断酒会は会費によって運営される但し補助金善意の寄附金等を受けることができる

断酒会は酒害者による酒害者のための組織であるという認識が、どんなに重要なものであるかをわれわれは知った。この言葉の持つもっとも重いものは、断酒会は断酒会員の主体性のある運営によるものでなければならないということである。従って、断酒会の運営に必要な経費はわれわれの支払う会費によって賄わなければならない。そして、われわれの支払う会費は会の運営に役立つだけでなく、自分自身に大きな収穫となって還元される。

価値のあるものに金を支払い、ないものには支払わないのが人間の法則である。われわれが会費を支払うのは、断酒会があるからこそ自分の断酒があるのだという、もう絶対的ともいえる価値観を断酒会に持っているからである。

入会当初は、そんなことはわからなかった。苦痛と喜びが交錯する断酒生活を続けるうちに、何から何まで一方的に断酒会に依存しては、自分の断酒も危いものだと考え、やがて、自分は断酒会を支

えている一本の柱でもあるという自覚を持つようになった。自分の断酒に必要な経費は自分が支払うしかない、会費の支払いはその最初にあるものだ、と考えるようになった。自立心の芽生えである。断酒会にたいして価値を認められない人たちは、会費を滞納するようになる。滞納することによって例会出席が消極的になり、やがて落伍する。会費を払わなくてすんだものの、自分の人生を投げることになる。

同じような傾向のある人でも、会費を支払うためにしづしづ例会に出席しているうちに、いつの間にか断酒姿勢が変わり、断酒会と自分の断酒に価値を見出すことになる。

断酒会は自助集団だから、自分に必要な金は自分が支払わなければならないといってしまうそれまでだが、会費を支払うことはわれわれにとって、必要不可欠な断酒法のひとつである。

もし断酒会が、国や地方自治体の補助金や個人の寄附金のみで運営されるようになったら、いったいどんな事態を招くことになるだろうか。

われわれが飲酒時代に身につけた依存的傾向は少しも改善されないだろう。従って、自立心の回復もないだろう。他人まかせの会員たちばかりになり、会はまるで活気のないものになるだろう。ついには、われわれは断酒することの意味もわからなくなり、会の崩壊につながることは必至である。



(指針と規範 P91～P93)



吹田市断酒会会員の現況



(平成 26 年度府断現況調査から。平成 27 年 4 月 1 日現在)

- 1 会員数：男性 28 名、女性 2 名、計 30 名
- 2 入会者数（平成 26 年度中）：
男性 3 名、女性 0 名 計 3 名
- 3 準会員数：7 名
- 4 会員の年齢構成：
40 代 2 名、50 代 10 名、60 代 8 名、70 歳以上 10 名
- 5 会員の断酒歴：
1 年未満 5 名、1 年～3 年 10 名、3 年～5 年 1 名、5 年～10 年 4 名、10 年～20 年 8 名、20 年以上 2 名
- 6 会員の入会時の年齢：
30 代 1 名、40 代 9 名、50 代 9 名、60 代 9 名、70 歳以上 2 名